

会議名	畜産草地研究所 平成 18 年度問題別研究会 「基礎研究と実用化研究の有機的連携を目指して」 －高品質畜産物に関わる研究からのメッセージ－
開催日時	平成 18 年 11 月 10 日(金) 10:00～17:00
開催場所	つくば国際会議場（エポカルつくば）中ホール（茨城県つくば市竹園 2-20-3）
主催者	（独）生研機構 畜産草地研究所 共催；日本学術会議新畜産学研究連絡委員会
参加人数	135 名（出席者名簿別添）；地方農政局 1、都道府県試験研究機関・行政機関・普及指導機関 62、大学 9（講師等 8 を含む）、民間企業等 14、生研機構関係（含畜草研）45、団体等 14、
1. 会議の概要 （研究会資料添付）	<p>我が国の農業もグローバル化の流れに取り込まれつつある。このような背景から、畜産物の更なる高品質化と消費拡大は、畜産分野における緊要の課題であり、その実現のためには革新的な基礎研究の展開と実用化研究との有機的な連携が必要である。そこで、近年の高品質畜産物生産技術にかかわる研究を基礎から応用まで広く俯瞰し、近未来の方向とその開発体制、特に基礎研究の成果をどのようにして応用研究に受け渡していくかについて、下記のような内容により議論された。</p> <p>当協会が行なうこの畜産新技術開発活用促進事業においても、畜産の現場で活用できる技術開発のために、広い分野の基礎研究を実用化技術に如何にして結びつけるかが大きな課題である。しかし、昨今の社会・経済的状況はこれを実現することが一段と困難になっている。この状況を打破する方策を探るべく収集した情報を報告する。</p> <p style="text-align: center;">記</p> <p>1. 挨拶 畜産草地研究所所長（農研機構理事） 柴田 正貴； 日本学術会議：（京大教授）矢野 秀雄；</p> <p>2. 高品質畜産物生産に資する基礎研究の展開；座長 山口 高弘（東北大） （1）新しい牛肉品質評価研究の展開方向；千国 幸一（畜草研） （2）牛の脂肪細胞分化・形成、その過程での重要な遺伝子の発現； 瀨 尚建（信州大） （3）筋内脂肪含量の高い豚に関わるゲノム解析の成果；栗田 崇（農生資源研） （4）アミノ酸制御による食肉中の呈味成分の変化； 藤村 忍（新潟大）</p> <p>3. あたらしい実用化研究の展開；座長 松本 光人（畜草研） （1）飼料イネ WCS 給与による高品質牛肉生産；中西 直人（畜草研） （2）食品リサイクル飼料を活用した霜降り豚肉生産技術の実用化； 設楽 修（兵庫県農技総研） （3）アミノ酸制御による霜降り豚肉生産；勝俣 昌也（畜草研） （4）地鶏肉のトレサビリティ；高橋 秀彰（畜草研）</p> <p>4. パネルディスカッション 座長；矢野 秀雄（京都大）・勝俣 昌也（畜草研） パネリスト；山口 高弘（東北大）・鈴木 啓一（東北大）古瀬 充宏（九州大）・入江 正和（宮崎大）・松本 光人（畜草研）</p> <p>セッション 2、3 で提供された話題の総括を基に、パネリスト、フロアーからの発言を交えてシンポジウム開催テーマ実現のための総合的な討議が行なわれた。</p> <p>セッション 2；日本の基礎研究はシーズとしてはトップクラスであるが産業とする実用化が課題であり、実用化研究が可能な基礎研究ではあるが、橋渡し役の試験の場が必要。高品質は成分、味、機能性で構成されるが頭で食べる時代でもあり、消費者への情報発信が必要。</p> <p>セッション 3；農研機構は農家で使われる技術の開発を行なっているが、現場ニ</p>

	<p>一ズの確認に問題があり、研究者が自分の立場で捕らえ、新しく技術化する必要がある。原理・原則が即現場技術となる時代が来ている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学の立場から；学生の指向が変化している。初めから畜産を希望する学生は少ないが、大学院では博士（動物関連）を育てている筈で、それを畜産研究の場に受け入れる態勢が必要。科研費（科学技術振興費）に頼るところ大であるが、実用的な畜産課題では貰えず審査・課題評価者の意識改革などの改善を要す。大学の立地が都市化して動物実験の困難性が増大。農水省（技術会議）は1億円までの実用化研究に金を出すと言っている。</li> <li>・公立試験場の立場から；大学・国研との協力・連携が大切だが、連携の組み方が問題で一方的のものであってはならない。</li> <li>・その他；サンの問題やその餌など将来の方向や現場も見据えなければならない。研究費獲得で財務省を納得させ行政施策の根拠となるような学術会議の提言を期待する。学術会議新畜産学研連畜産分科会でも検討を開始している。研究費獲得のための企画力も重要。高品質畜産物の概念を消費者反応まで拡げて考え、社会科学的立場からの情報開示、消費者教育も重要。</li> </ul> <p>5. 閉会挨拶；泉水 直人（日本畜産学会理事長）</p>
<p>2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名</p>	<p>・3. (3) のアミノ酸制御による霜降り豚肉生産の実証試験で、日本標準飼料成分表による設計値と実測値の間に乖離がみられた。これは基礎研究（データベース）の空洞化を示す一事例と考えられ、基礎研究と実用化研究と生産現場の有機的連携を考える上で、先端的でない基礎研究の問題点を示していると考えられる。</p>
<p>3. その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>・3. (4) 地鶏肉のトレサビリティーで、地鶏肉識別の問題点がよく理解できた。これは、実用化の困難性が予測できる研究課題の事前評価の重要性を示す事例と考えられる。</p>
<p>4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>・当協会がこれまでに助成、委託して行なった牛肉質評価指標、地鶏肉質評価の技術確立のための開発研究では、いずれも所期の成果が得られていない。徒に実用化を目指す課題を選択するよりはまず、数値化や分析装置開発の基礎となる研究を先に取り上げるべきであろう。</p>
<p>5. 会議の所感</p>	<p>・今回のシンポジウムテーマは畜産技術開発の場における重要な今日的命題である。しかし、今回のシンポジウムで採り上げられた課題は、限られた一つの分野についての試験研究機関と一部の大学関係者によるものであった。今後さらに、シンポジウム開催の準備と開催案内に時間をかけ、分野を広げ、行政、普及、消費者の立場からも参加したシンポジウムの開催が必要と感じた。</p>
<p>報告者</p>	<p>針生 程吉</p>